愛媛県水産研究センター　栽培資源研究所の主要業務（令和７年度版）

１　役割

漁船漁業を中心とした瀬戸内海（燧灘・伊予灘）の水産業の振興と沿岸漁場環境の保全に貢献する調査・研究

２　課題

（１）重要魚種の資源添加と適正管理による持続的な漁業生産の確保
（２）魚介類の成育場として重要な沿岸環境（藻場・干潟等）の監視と保全
（３）瀬戸内海の養殖業（ノリ・貝類・魚類）に対する各種の技術支援

３　研究テーマ

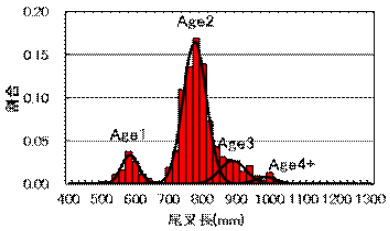
（１）水産資源の適正管理のための調査・研究

ア　水産資源の動向把握

燧灘・伊予灘の漁業資源について、発生量、漁獲量、体長、年齢組成等の調査をもとに、国と協力して資源量や資源水準等の評価を行い、漁況予報として漁業者に提供しています。

水揚調査・生物調査

燧　灘	カタクチイワシ、マダイ、ヒラメ、トラフグ、サワラ、マアナゴ、タチウオ、オニオコゼ、ハモ、マコガレイ、ガザミ、キジハタ
伊予灘	カタクチイワシ（シラス）、マダイ、ヒラメ、トラフグ、サワラ、マアナゴ、タチウオ、オニオコゼ、ハモ、マコガレイ



サワラの年齢別尾叉長組成

瀬戸内海水産資源の親魚量の動向（マダイは中西部）

カタクチイワシ	：増加傾向
マダイ	：増加傾向
ヒラメ	：増加傾向
トラフグ	：減少傾向
サワラ	：増加傾向

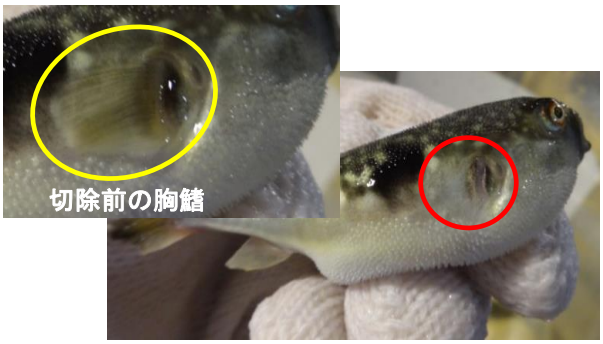
（2022年、水産研究・教育機構、愛媛県、関係県）

イ　水産資源の保護培養

サワラやカタクチイワシなどは、瀬戸内海域各府県の関係漁業者が操業期間や操業海域を自主的に規制して、資源の保護培養に努めています。このうちカタクチイワシは、広島・香川・愛媛3県の関係漁業者が連携して、休漁期間や休漁日を設定するなど、資源管理に取り組んでいます。

また、トラフグ、クルマエビについては標識放流・追跡調査を行うなど、水産資源回復に向けた取り組みを行っています。

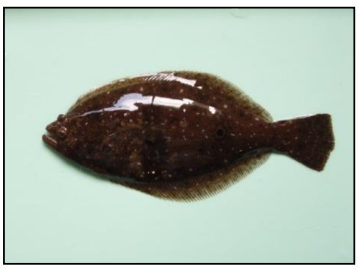
標識を装着したクルマエビ



トラフグ放流種苗への標識（胸鰭の切除）

ウ　放流用種苗の供給

ヒラメ：27万尾（80mm）　キジハタ：9.3万尾（80mm）　トラフグ：5万尾（70mm）　アユ：20万尾（50mm）



ヒラメ稚魚

キジハタ稚魚

トラフグ稚魚

エ　種苗生産技術の開発

全国的に漁獲量が極めて少なく超高級魚である「シロアマダイ」の研究を行っています。受精卵を確保する技術開発、放流用種苗の生産技術の開発、生態調査を踏まえた放流技術の開発などに取り組んでおり、種苗生産の目標尾数は10万尾です。種苗の量産体制を構築するとともに、放流技術の開発や漁業者と一体となった資源管理により、シロアマダイの一大産地化を目指しています。

シロアマダイ

（２）沿岸環境の保全のための調査・研究

漁場環境のモニタリング、赤潮の発生監視や伊方原発周辺の温排水影響調査などの調査・研究を行っています。

調査船「ゆり」
平成19年竣工（4.9トン、463kW）

沿岸域のプランクトン調査

（３）瀬戸内海の養殖業を支援するための調査・研究

栄養塩の減少によるノリの品質低下、生産量減少に対して、安価な施肥剤や簡便な施肥技術の開発に取り組んでいます。

ノリの支柱養殖

生長し、収穫間近のノリ